２７．岐阜団体の入殖

大　沢　く　め

※明治３８年５月１日生、父善助は岐阜団体の総代（団長）

布団に積る雪

私たちが北海道に渡る前に、今遠軽に居る大沢重太郎（親類）さんが、湧別村芭露に居り、私たちが団体で来るようになったのも、重太郎さんの父が募集に来たと聞いています。

最初の払下地は、遠軽の社名渕原野でしたが、湿地で地味が悪く、生計の見込みがたたないので、重太郎さんを頼って、芭露、計呂地に、団体員は分散して落着いたのです。

これは大正２年の春のことです。

それから父と重太郎さんが一緒に、再出願した結果、上藻の現在の土地が附与されることになりました。

芭露から上藻に入ったのは、その年の１０月の中旬過ぎで、雪が盛んに降っている中を、重太郎さんに、土産子馬に馬橇をつけて、荷物を運んでもらいました。

上藻へ入る道がわからず、今の高橋寿男さん附近から山越えをしたが、人の踏み分け道よりなく、馬橇の邪魔になる木を伐りながら入りましたが、本当に酷い道でした。

私は、靴を買ってもらい履いて来ましたが、足が冷たくて歩けず、馬に乗せられたり、引張ってもらって来たものです。

母は、自足袋に、草鞋を履いて来たが、中興部の岩越（駅逓）さんに泊まったとき切れてしまい、そこで新たに買って履き、六興まで来て、古川さんの店に一晩お世話になり、上藻の３号には、夕方近く着きました。

私たちの入る家は、大正２年の夏のうちに、芭露から上藻に出向いて着手小屋を建て、秋に入る人と、翌年春早々に移住する人とに分れました。

着手小屋は粗末な掘立てで、屋根も壁も、タモの木の皮をはいで使い、乾いてすき間だらけでした。冬吹雪になると雪が吹き込んで、布団の上に厚く積もり、或る大吹雪の朝に、父が「生きているだろうな」と言いながら、布団の雪を除けてくれたのを、よく覚えています。

吹雪の後は、家の中の雪を外に出すのに一仕事だったものです。それでも私の家は、丸太の上に割り板が敷いてあり、開拓者には、床のない家が沢山ありました。

大凶作と生活

私たちが移住した大正２年は大凶作で、芭霧で、新しく移住する上藻で使う種子をとるために、僅かの土地を借りて作付しましたが、８月下旬に大霜があり、南瓜はべたべたになり、唐きびはすっかり倒れ、母が畑の中で泣いていたのを、忘れることができません。

上藻に移住したとき、此所も凶作で、私たちより早く入殖していた人たちの庭に、真白にウバユリの根が干してあり、これが冬の常食になったのです。幸い私の処は家族が少なかったので、そういう物までは食べずに済みました。

私たちがここに入る時に、重太郎さんが送ってくれた土産子馬と、馬具や馬橇をそっ

くり譲ってもらいました。この馬は、団体の人たちが共同で使い、大変重宝がられ、父は満足に馬の使い方も知らないくせに、先生になって、団体の人に馬具の付け方などを教えていました。

今の瀬戸牛（西興部）旧市街に、小林通、六興に古川の店がありましたが、満足に用が足りず、よく興部まで買物に出ました。

初めは、父が一人で団体の買物をしたようです。マッチ１個、本綿糸１把というものまで、団体の人たちの買物をまとめて買って来ました。正月には、モチ米１升とか、家族が多いから３升とかと言うように取りまとめ、みかんも粒買いで、５個とか、３個とか、子供の数で買って来たものです。

学校と弁当

入殖当時は、上、中藻とも学校はなく、六興まで通いました。遠いので、余り学校に行かずに免状がもらえるように、父が交渉しました。これは私だけでなく、殆どの生徒がそうでした。

冬は父が先になって雪を踏み固めてもらい、道に迷わないように、木の枝を折って差し、目印にして学校に行ったものです。

その頃の生徒の弁当は、南瓜の煮たのや、そば団子などもあり、包むものがないので、南瓜の葉に包んだりしたのもありました。

私は一人子だったので、僅かの米に、いなきびや、豆などを混ぜて、その上に茶腕をかぶせてご飯を炊き、弁当をとってもらいました。

学校に行っていても下校してからは遊ぶ子供はおらず、皆仕事をさせられて、私は沢からの水汲みと、小さな鍬を１５銭で作ってもらい、畑耕しをさせられました。荒地ですから、なかなか大変で、柔らかい所だけ耕して、固い所には土をかぶせて、誤魔化しをしたものです。

開拓のころは、家の状態、生活、食物、衣類などすべてが、今の若い人には、想像もつかない苦労ばかりでした。